

エミール・ラスクの『判断論』と西田幾多郎

大熊 治生

倉敷芸術科学大学芸術学部

(1998年9月30日 受理)

(序)

エミール・ラスク (1875-1915) はヴィンデルバント-ロツェーリッケルトとつづく新カント派 (西南ドイツ学派) の最後に位置する哲学者である。ラスクは既に1908年頃から、師であるリッケルトに対する批判を展開しつつ、自己の立場を確立し、1912年にはヴィンデルバントの後を襲ってハイデルベルク大学の哲学教授となっている。ラスクは様々な哲学者に影響を与え、将来を嘱望されていた。しかしラスクは、第一次世界大戦に参戦し、1915年に四十歳の若さで戦死してしまう。

このラスクの遺稿を編纂したのが『弓と禅』や『日本の弓術』等の著書で日本でも有名なオイゲン・ヘリゲル (1884-1955) である。ヘリゲルも、ヴィンデルバントに師事した新カント派の哲学者であり、1923年にはリッケルトのもとで教授資格をとっている。ヘリゲルは、哲学の面でラスクと親密な関係を持っており、そのため第一次大戦から帰還後すぐに遺稿集の編纂にとりかかったのである。

ヘリゲルは新カント派の出身でありながら、神秘主義に深く傾倒していた。しかし彼は文献からの知識では満足せず、生きた体験として神秘主義を吸収しようとしていた。ヘリゲルはハイデルベルク大学の私講師となっていた1921年、偶々日本からドイツに留学していた哲学者を通して日本の禅仏教に惹かれていった。そして1924年、仙台市の東北帝国大学に哲学の教師として招聘されたヘリゲルは、その後の六年の日本滞在の間に弓術を通して禅を学んでいったのである。

しかしヘリゲルの著書の中には西田の名前は登場しないし、またヘリゲルに関する文献にも西田との関係は出てこない。ただ京都大学で編纂した『西田幾多郎全蔵書目録』に拠ると、その蔵書の中のラスクの著作集には、その編者 (すなわちヘリゲル) の献辞が書かれている。これを見れば何らかの交流があったとも思われるが、ここではこれ以上追求することはできない。ただ西田はそれ以外にも、ラスクの著書を持っていたようであり、ラスクに対する関心の高さがうかがえる。

西田がラスクの名前を引いてその概念を検討するのは『場所』の論文が最初である。そこで西田は、「当たる」「当たらない」とか、「対立的」「無対立的」等といったラスクの内容を、自己の文脈の中で位置付けようとしている。西田は『場所』に続く論文『観知的

世界』に於いても、新カント学派の価値哲学を批判し、価値の対立を越えたところから、価値を基礎付けようとしている。西田の場合にはそれは「絶対無の場所」であり、ラスクでは「無対立性」という概念になるのであろう。西田はラスク思想の中に、自己の思想との類似点を見出し、自己の体系の中に取り入れていった。当時としてはまだ新進の、三十代の学者の理論にも並々ならぬ注意を払い、丁寧に読み込んでいく西田の進取の精神には、まさに目を見張るものがある。

我々は西田がラスクのどの部分を、どのように参考にしたかを読み取っていくためにまずラスクを読まなければならない。しかしラスクの文章は非常に解りにくい。ドイツ語のままですら理解することは、かなり困難なことであった。そこで以下に『判断論』を訳出することにした。もとより横の物を縦にすればすむものではなく、何処までこなれた日本語として、原文のドイツ語の意図を汲むことができたか、はなはだ心許ないが、訳者の現在の実力ではここ迄であった。以下に訳したのは『判断論』序文の1-16ページである。

註

- 1) 『西田幾多郎全蔵書目録』山下正男編 昭和57年京都大学人文科学研究所刊参照。p.54 (no.420) には (Herrn Prof. Nishida mit Freundl. Grussen vom Herausgeber.) と書かれている。
- 2) エミール・ラスクとその哲学、および西田幾多郎との関係については、北樹出版刊『場所論の種々相』所収のニールス・ギュルベルグ氏の論文に詳しい。此処でもたいへん参考になった。
- 3) E. ヘリゲルとラスクとの関係については『禅の道』（講談社学術文庫）、『日本の弓術』の訳者による解説に詳しい。

エミール・ラスク著『判断論』

Die Lehre vom Urteil ; Tubingen Verlag von J. C. B. Mohr (Paul Siebeck) 1912

(序)

s. 1. カントのコペルニクスの業績は理論的哲学と論理学の発展全体における転換点を形造っている。カントの革命的成果によって理論的なものはそれ自体として、完全に異なった地位を哲学の全体像の中で獲得したのである。それは対象に対する単なる模倣的な、影のような、相関者の状態から自由になったし、その勢力範囲は、対象自体のただ中へ置き移されることになったのである。しかしこのように論理的なものが、構成的要素として対象自体の平面へと移っていくことによって、以前にはメタ論理的なものへ陥ったように見えた、完全に新しい区域が、論理学の専門分野として獲得されたのである。しかし対象的なもの—論理的なものについてのこのような理論が付け加わることによって、論

理学の古いテーマは全て排除されるわけでは決してない。というのもそれは対象領域自体に固着しているのではなく、対象領域に対して距離を保っている現象に関わっているからである。このように以前の境界を越えて論理学が拡大していくことによって、たしかに完全に新しく全体が再構築されることになる。というのも論理学は唯一の学として、今や对象的、非对象的理論的意味の問題領域を包括しなければならないからである。以前には対象と論理的なものとの間に存在した割れ目は今や論理学の内部で全てを支配する間隙へと変化したのである。(s. 2.) 模写的なものや、对象的意義を持たないもの、これらのものが理論的なものを見出すことはできず、むしろそれは、理論的なものの性質になっているのである。以前に理論的なものの全てであったものは、今や第二義的な領域に沈んでしまった。論理学全体は、それ故、最上位の分類に従えば、对象的現象の理論と、非对象的で論理的な現象の理論へと分かれていくか、或いは、一方で「先験的」「認識理論的」「実質的」論理学へ、他方で「形式的」論理学へと分かれていかねばならない。形式的論理学に於いては、論理的現象は全て一つにまとまっているのでなければならない。というのも、それらの現象は諸対象と一定の距離をもっており、それ故对象的意義を欠いているからである。

しかし、それと共に同時に論理的なものの領域に於いては方向と序列が決定される。対象的一論理的なものの領域が表現しなければならないのは、根源的なもの、原初的なもの、主観性によってまったく侵されていないもの、従って最高の意味で客観的なもの、即ち理論的領域で本来的に最終的な目標であろう。これに対して非对象的-論理的なものの領域は、従属的地位でこれらに比例しているもの、何らかの仕方で、主観性によって操作された対象把握の手段、要するに第二義的なもの、補足的なものを表現しなければならないであろう。それ故このような論理学の定位においては、最後に論理的な对象的現象と、単に二義的な、論理的な把握現象は分離される。後者がまた *proteron pros hemas* (我々にとって先なるもの) をも与えることができるとすれば、対象領域の構成要素は事象的に最初の位置に立つことになる。「諸範疇 (カテゴリー)」はカント以来このような対象的一論理的な契機として現われている。カテゴリーが今や「素材 *Material*」として対象性にまで高まる「形式」であることが明らかにされることによって、カテゴリーの形式に於いては、論理的な原現象が見られる。即ちカテゴリーとカテゴリーの素材へと分割された物のなかに、そして、(s. 3.) このような諸対象の分節化のなかに論理的な原構造が見られるのである。それ故、論理学のあらゆる部分によって、対象構造の研究と範疇論は原現象へと進んでいくことを命じられるのだが、一方それとは反対に「形式的論理学」と「方法論」は最後には従属的な姿勢をとるようになる。

一度このことが認められると、それによって論理学全体のテーマの配列に対する、より確かな定位点が獲得される。対象的一論理的な領域との比較や、原現象との比較はあらゆる論理的現象の配列に対する統一的尺度を与えねばならない。カント主義の時代における

論理学にとって、即ち「先験的」「形式論理的」問題を、ひとつの優先的な統一体へと統合する論理学にとっては、対象論理的領域に対する判断の関係を明らかにすることは、それ故、判断論に於いても、まさに最高の課題とならねばならない。この意味で、判断の理論を理論的哲学の基礎概念に関連させること、そして判断領域に対して、それを先験的論理学的原構造と比較することによって、論理学の全体的関連における絶対的場所を規定すること、このような研究が目標に指定されるのである。判断が「概念」や「推論」に、どのように関わるか、ということは、カント主義的に方向づけられた論理学の時代に於いてはもっとも重要な問題ではない。むしろ基本的な問題は先験的論理学の領域に対する距離を明らかにすることにある。

それ故この論文の主な仕事は、論理学の先験的拡張と結びつけて、非対照的な形成物の抑圧を判断論の中で際立たせることである。(s. 4.) きわめて厳密に意識されねばならないのは、論理学的現象という全体構造の中では、判断は二次的な非物象的な領域に属しているということである。このような見解は現在でもなお、広く普及した見方を通して、絶え間なく不明確にされてしまう恐れがある。それによれば判断は、理論的構造体という分節化した構造の中に、最終的な独立的な統一体を、即ち理論的有機体の細胞を形づくるのであり、またそれによれば、真実の論理的核、或いは定位点としての判断によって論理的問題の総体性は統一的に支配されるのである。しかし、論理学においてはただ前カント主義のみが、判断を客観的にもっとも高い位置に置く権利を有つてであろう。判断に対しては非对象的、論理的領域の内部では優越性が相応しているということは何と云っても否定することはできないのである。しかしこの領域全体はそれ自体、まさにカント主義的に考えられた論理学的問題の全体を見渡す眼差しを前にして、より低い領域へと沈んでしまう。次の表現は *proteron pros hemas* (我々にとって先なるもの) としての判断からの出立に対して向けられているのではなく、最高のもの、最後のものとしての判断にとどまることに対して向けられているのである。その表現が説明しなければならないのは、判断が对象的意義を失った構造体として、不可避免的に自らを越えた方向を指示するということである。それは判断の領域をその孤立化から解き放ち、拡大された論理学のより大きな連関の中へ置き入れようとする。

判断が、諸対象との関係において、模像的なものと距離を持っている、ということ、このことは確かに、今や、前カント的論理学によって認められざるを得ない。しかしカントの時代に於いて同じようには明確に洞察されなかったのは、コペルニクスのテーゼに従えば、対象性の中へと溶解していくところの、先験的、論理学的契機からの判断の距離が大きのままにとどまっている、ということである。(s. 5.) 对象的・論理的なものの中へ誤って以前の前カント的な論理的なもの一般の代理者、即ち判断的・論理的なものを読み込もうとする誘惑は納得のいくものであった。したがってその時には、コペルニクスのテーゼにも関わらず、判断は前カント主義に於いてと同様、論理学における最上位を

しめる。しかし、それによってさらにずっと高い、対象領域自体の中へ達する意義を保持する。それ故、これまでは論理学の内部で、判断に対して最高の場所が与えられたのだが、それは次のどちらかの理由によるのである。即ち、前コペルニクス的に、その対象からは、判断がひとつの距離によって分離されていることが認識されるような、そういった対象が、もはやまったく論理的なものの領域には存在しないように見えたからか、或いは諸対象を論理的なものの中へとコペルニクス的に引き入れることによって、对象的論理的なものとの判断の距離が隠されたからか、というどちらかの理由によるのである。一般にカント主義的に影響を受けた論理学に於いては、判断と先験的問題領域との関係に立ち入ることになると、そこでは判断領域と、範疇領域との境界が何処にも認められなくなってしまふのである。それに対して以下の論述で示されるのは、判断に対しては、全ての先験的、物象的 (gegenständlich を「对象的」ではなく、「物象的」と訳す) 意義が剥脱されるということである。判断は先験的論理学の領域から完全に追放されており、一つの深淵によってそこから分離されているので、完全に、単に「形式論理的」な意義を持ったものとして把握されねばならない。

しかしこのように判断を貶しめようとする話は、全てただここで主に問題になっていることを否定し、打ち壊そうとする表現とみなすことができる。つまり、判断領域の制限を越えること、それを包括的関連へと組み込むことが、論理学全体の分節化に対して根本的意義を持っているという帰結に対する否定的で破壊的な表現とみなすことができるのである。(s. 6.) というのはまさに非物象的なものの内部では、判断が最初の地位をとるのであるから、そのような判断に於いては、我々はちょうど論理的なもの二つの王国の間の境界にいることを、即ち物象的なものから非物象的なものへの決定的な移行点にいることを見出すのである。それ故まさに此処には、明瞭性を二つの領域の距離を越えて広げるのに適した場所も存在している。判断の立場が一旦正しく特色付けられるならば、結局そこからそれ以外の論理的現象の、全体的、段階的構造は明らかにされるのである。

ここでもしも物象的意義を欠いている諸現象がより低い従属的な領域へいくように指示されるならば、この企ては、カントの先験的論理学へと遡る試みに加わることになる。それはいわゆる「形式的論理学」から不当な独立性を奪うことであり、それに属する論理的諸現象を「事象的な」即ち構成的・論理的、或いは物象的意義を持った事象へと結びつけることのみを通して把握することである。しかも、そのようにして主張された構成的・論理的なもの優位は、まず第一に、範疇論自体の内部で主張される。そして、それにつづく研究では、コペルニクス的転回を通して提示された、論理学の内部での順位が、それを基準づける判断論の章で試されることになる。しかしその際、判断の構成的解釈変更がめざされているなどと言うわけではない。反対に判断が、むしろ構成的で重要性を欠いた構造として見做されねばならない。その際明らかにされるのは、既に範疇論の内部で露見しているように、論理的諸現象を構成的原領域から、或いは最大限の客観性から遠ざけ

ることが全て、主観性が内部へと動いていくことに基づいている、ということなのである。

(s. 7.) しかし判断を定位したり、そしてそれを物象—論理的原領域と比較する際には、これらの普遍的要請にとどまっていることはできない。判断はたしかに客体からは、一つの距離によって分かつたれるはずであるが、しかし同時に明らかに、何らかの仕方で客体へと向けられているのである。それは何らかの仕方で、模倣的に対象をとらえる手段として把握されるであろう。判断に於いては何らかの仕方で客体の要素によって支配されるだろうし、客体は何らかの仕方で判断という構築物の中へはめこまれるであろう。先行したものに於いては、判断に対して言われた非物象的意義が、諸客体をこのように判断的形成物へと合体させることによって調和させられるであろうが、それはただ、判断の本質が、このような客体から遠ざかることのうちに—即ち客体をいわば歪曲したり加工したり変形したりすることに帰着するような離反のうちに—存立するという仕方で、なのである。実際、判断にとって特徴的なこととして、人工的な構造の錯綜が単純な物象的原構造へと歩み寄ることが明らかにされるであろう。まさにこの人工性は不可避免的に判断領域を越えて、駆り立てる契機として示されるであろう。

対象構造、即ち錯綜と改造を経験するものの基礎づけなしには、特殊な判断構造の確立は、それ故まったく不可能であろう。物象的構造はそれ故、構造研究に対しても標準点を与えねばならないであろう。しかしそれは次のことを意味する。即ち、カントの先験的論理学は、客体を範疇形式と範疇的素材へと分解するものであるが、それは決定的に判断の構造の分節化へと出張っていくのであろう、ということである。(s. 8.) その結果として、その時明らかになるのは唯一可能な、文法から解放された、つまり超(メタ)文法的な主語—述語理論である。このように判断構造が客体の構造と対置され、使命が認識されることによって、一つの橋が架けられる。その橋は、一方は判断の構造論に、他方は先験的論理学に、そしてとくにカテゴリー論に架かっているのである。このような構造の点でも判断論は先験的論理学に結び付けられないままにその傍らにあることはできない。それは孤立化から解放されねばならず、論理学の先験的部分への通路は開かれたままに保たれねばならない。

判断の構造についての理論は、判断の「意味」の理論としても示され得る。というのは、意味の統一性、或いは全体性ということによって了解されるのは、ある論理的に重要な諸要素から構築される構造的組織以外のものではないからである。論理学の言語的慣用においては、たいていは、意味の統一性の代わりに、諸作用や、諸機能のある総体(総括概念)が現われるとすれば、このような諸作用の論理学理論においては、単なる活動性は、それ自体としては、よく考えられることはできない。むしろなにかある仕方で、それと結びついた論理学的に重要な契機への顧慮がなされるのがせいぜいなのである。単なる活動性自体において、なんら論理学的有意義性が存在し得ない限りは、論理学的に重要な

ものは、諸作用から区別されねばならず、このような作用の「意味」として、意味の単なる担い手としてのそれらの作用から取り除かれねばならない。従って論理学的基礎概念の解明に対しては、次のような認識が必要である。つまり、それは論理学的判断理論は大部分は、諸作用から引き離し得る意味の構造と関わっている、ということである。

(s. 9.) フッサールのおかげで、現代の研究が意識するようになったこのような見解は、すべてこの論文の中で主張された判断論の基礎になっている。この見方によれば、作用自体は、それが成されるときにのみ、意味の基体として、また意味に対して、それを担うものとしての役割に従って、考察されるのである。我々は、次のごとく言い得るのである。即ち、大多数の論理学的研究は、先験的論理学に属さず、範疇的形式内実の解明に、捧げられてはいないのだが、その研究は一定の理論的形成物、統一性、組織などの合成物と、例えば、概念、判断、推論などの分節化と関わりあっているのだ、と。以前になされた発言に従えば、この論文の意図は、次のことでなければならない。即ち、理論的意味の理論を、範疇と、範疇的素材にしたがって、先験的な、原的分節化によって、支配されるようにすること、これである。

さて、これまでの意味の論理学は、全て、非物象的意味の論理学であった。それ故「意味」—例えば判断の—は常に「客体」に對置されるのが常である。以前に話題にした「橋渡し」ということは、今や一方では非物象的意味構造の理論と、もう一方では、物象的構造、ならびに範疇的形式の理論との間の関連づけとして現われる。

したがって、判断理論を通して、結合の線が引かれ得るのであるが、それは現象の非物象的なものと、物象的なものとの間に引かれ得るごとく、構造と、範疇的形式内容との間にも、即ち、体系的表現の中で、互いに交差する論理学の主要な相違として、(s. 10) 明らかにされるような、二つの概念対の構成要素の間にも、引かれ得るのである。

しかし、判断の特別な構造の人為性と固く結びついたものとして示されるのは、完全に規定された現象、即ち意味の物象性の現象である。これについても、緒言の中で、二、三、の短く暗示的な、単なる前奏曲となる所見が示されねばならない。構造論においては決して判断領域の範囲は踏み越えられないのであるから、このような対立の現われも、決して動揺させられることはありえないであろう。理論的組織構造を「真」「偽」、肯定、否定といった対立を通して規定することは千年にわたる論理学の伝統であった。意味の理論においては、論理学は決して非物象的な意味を、また、対立的に引き裂かれた意味、或いは命題や陳述や判断から取りのぞかれるような意味を、即ち、「真、あるいは偽であり得るもの」を、決して凌駕してはいないのである。それ故また、アリストテレスによって基礎付けられた、判断構造の分節化は、一方では主語、述語、繫辭に基づくものであり、他方では肯定と否定という対立的契機に、従って「質」に基づくものであるが、それは自らの人為性のために自らを越えるものと考えられてはいないのである。

さて、非物象的、人為的構造にとどまっていることをやめると、それに続いて、即座に

対象性の領域の踏み越えが引き起こされる。それ故、「真」或いは「偽」であり得る命題の意味と、判断の意味へと、対立的に引き裂かれた構造に対しては、先験的領域において、対立のない判断が対置され得るであろう。しかも、無対立性への、このような歩みに対しては、構造の錯綜に対する反省が唯一の正確な道として示されるのである。

(s. 11) 構造という標準器のうえに、対立の問題全体が定位されている、ということがもっとも重要視されるべきである。

妥当概念と、価値概念によって定位された、論理学に対する対立を越えて追い立てられることは特別な結論に至ることになる。判断とか、一つの態度の「あれかこれか」とどまっていれば、それは妥当とか、価値とかいう契機を、妥当性と非妥当性、価値と非価値、といった対立契機、或いは二者択一との絡み合いへと陥らせることになるであろう。それ故実際、論理学的妥当理論と価値理論は、判断論から強烈な影響を与えられたのである。対立はその理論にとっては、妥当契機と価値契機という原現象として当てはまるのであり、そして論理学全体を支配するのである。本来的な妥当の統一性と、価値統一性として、また、価値と非価値との対立を提示する形成物として基礎付けられるのは、何処においても命題と判断の全体性と完結性である。

従って、判断領域を越えているということによって、妥当概念、価値概念という対立性との問題の錯綜も除去される。妥当性と非妥当性という対立よりも、無対立的妥当作用が、また価値と無価値という対立よりも、無対立的価値が高く評価されるであろう。無対立的妥当と、価値という絶対的な不可避性は、次のことによってその真なることが証明されねばならないであろう。それは即ち、それ（無対立的妥当と価値）が存在するのでなければ、我々は完全な分裂と困惑の中で、ある最も重要な論理学の諸現象、例えば範疇に対して対立することになる、ということである。

此処でもたしかに対立は正当な *proteron pros hemas* (我々にとって先なるもの) として表示される。妥当と価値の対立性からは、論理学研究全体の意味へと光が広げられた。判断からの出立は、論理学全体に対する妥当性格と価値性格の発見に役立ったのである。

(s. 12) まさに論理学的妥当－価値理論はまず、論理学を哲学的学科の系列へ組み入れることを明らかにする、という使命を果たした。肯定と否定、承認と否認、二者択一的な態度決定、真と偽についての決定と裁決、判断の「質」等々において、明らかになってくるのは、論理学研究の他の対象の中に、例えば、対立のない範疇的形式の中に隠れていた、妥当－価値の、そしてまた理論的領域の特質である。

それ故この論文の中で、妥当と価値の無対立性へと進むことになれば、その歩みは次のように起こってくるかも知れない。それは即ち、まず第一に、対立的な価値特性において、つまり、判断の価値理論を作り上げることを、それに負っているところの領域において立場をとる、というようにである。この論文全体はそれ故、完全にその理論によって下絵が描かれた道へと歩み入るということになる。

以前に、論理学のさまざまな部分の間に架橋する可能性について予告的に触れたが、今度はそれに対して、さらに、対立と無対立という概念対が適用される。非物象的な、対立的に引き裂かれた組織構造の枠内では、無対立的対象構造や、無対立的範疇形式にはどんな役割がふさわしいか、ということに意識が向けられるならば、そして次に判断意識の対立性が、先験的原領域のうちにある、無対立性の理論を通して蔽われるならば、それによって対立的な現象と、無対立的なそれとの間の割れ目に架橋する手段が現われてくる。

上述のスケッチから非常に多くのことが明白になった。それは即ち、それに続く判断論の全体が、普通の考察し方の逆転を前提としている、ということである。(s. 13) それは判断の構造を最終的なもの、還元不可能なものとして受け取ることはできない。むしろ、それをあまりにも深く主観性に巻き込まれたものとして、またより本源的な諸現象からの説明と演繹を最も必要とするものとして見なさなければならない。

しかし、それに加えて、今我々に知らされたのは、無対立性への歩みに於いては探すこと、見出すこと、という作業の出発点が *proteron pros hemas* (我々にとって先なるもの) でなければならないということである。即ち、それは我々にとってまず最初に存在する認識の過程、つまり対立的に分化し二者択一的な働きをする判断の決定作用でなければならない、ということである。というのは実際、対立的領域から出立すると、我々はそこで休むことはできず、不可避的に無対立的な領域へと追いやられる、ということが示されねばならないからである。

それにもかかわらず、やはり、対立的な判断領域の内部で、二つの異なった道程があり、それに対して概念対の二重性が対応している。つまり、理論的な対立問題を自分のものにするために、そしてはじめから、それについての研究全体に対する展望を獲得するために不可欠なのは、二つの対立対を立てることが、徹頭徹尾必要である、というほとんど何処においても、きちんと考察されることのない、事情を記憶することである。それは、完全に対立領域の内部で働く問題であり、無対立性とか、対立を踏み越えることが可能であることとかの問題からは、独立的に成立する問題である。

ところで、もしも以下の研究が対立領域から出立するとすれば、その領域の内部で、我々にとって最も近くにある対立対ではなくて、むしろ、実質的に先にある対立対を、出発点として選ぶことが賢明である。(s. 14) 即ちそれは我々の最も近くにあつて、さらに大きい錯綜と、人為性とは付着しているのだから、対立の解明のためには、一般に、具体的に最初の対立対に頼ろうとすることは必要である。したがって *proton pros hemas* (我々にとって第一のもの) から出立することが問題なのではなくて、むしろ唯一般に、*proteron pros hemas* (我々にとって先なるもの) から、即ち対立的構造から出立するのならば、それは必要であり、また十分である。

それにも関わらず、後の表現の中でではないとしても、今ややはり、序文の中で簡略に暗示されるのは、我々の最も近くにある段階から、それを規定する段階へと至る道であ

る。その際、暫定的な言及によって、容認できるようにされるべきなのは、次のことである。それは即ち、判断領域の対立対は、それ自体だけで存立することはできず、むしろ第二の対をその前提に持っている、ということである。この第二の対は、それ故実質的にはより先行しているのだが、それは第一章のテーマをなしているのであるから、今や次につづく序文の最終部分の中では、それが暫定的な方向付けにとって必要であるかぎり、この対立対の場所が明らかにされねばならない。

最も我々の近くにあつて、最も周知の、そしてほとんど専ら、研究の基礎になった対立対は二者択一的な判断の決意から取りのぞかれている。しかし、その対立対の内部では、なお二重の区別がなされるべきである。まず第一に、判断するための態度決定自体の価値対立である。即ち的中という価値と、過失、或いは過誤という無価値の対立、即ち該当すること（適当な表現が不足しているが）と、不正確性、或いは誤謬という対立である。そこから区別されるべきなのは、判断されたものの対立であり、したがって判断の中で「思索され」「考えられ」「述べられ」たものの対立であり、即ち判断の意識の中で明白に刻印される対立である。この、判断から分離し得る意識の対立は、正しさと誤りという対立として示されることができる。（s. 15）論理的な意味で、判断と命題に、それぞれ正しいものと誤ったものがある。即ち「真理それ自体」（正当性）と「誤りそれ自体」、即ち意味という判断の契機、或いは統一性についての正しい、或いは誤った構造がある。

態度の対立と、このような判断の意味の対立とを対置することは、常に企てられる対立対の区別である（註1）。

次にそれに対して認識されるべきは、意味の正しさと誤りは、他の、しかも尺度として働く対立対に依存していて、この対立対がなければ理解され得ないが、しかし、これを無視する普通の考察仕方は、一つの圏を閉ざしているのだということである。

註

（註1）カントは次のように規定している。「真の反対は偽であり、偽は真と考えられるかぎりは、誤りといわれる。」論理学（Jaesche）序Ⅶ。誤謬は作用それ自体に帰せられるのであるし、虚偽は意味に関わるのであるから、両者は時々まったく鋭くではないが、心理学的、論理的現象として互いに対立する。R. リヒター；『懷疑主義は哲学である』Ⅱ，1908，176. 参照。フッサールによれば「論理的述語は、真として、偽として」「理念的な陳述の意義という意味で」「内容」に関わる。一方「正しさ」は、真の内容を対象として持つ判断に帰属する。『論理学研究』Ⅰ，1900，176. 註。Ⅱ，594. 以下も参照。アリストテレス『形而上学』Ⅴ，29，1024bにおける *pseudos* のさまざまな区別は、おそらく同じ意味で解釈されるべきである（アリストテレスについての付論，第一章，第一節末尾を参照）。というのも、大体において、アリストテレスの判断と「判断内容」は互いに識別し合うからである。例えば *cat.* c10, 12b. 6 以下を参照。更に、マイヤーの「アリストテレスの判断論における客観的-論理的側面と、主観的-真理学的側面の識別」『アリストテレスの三段論法』Ⅰ，1896，10. 以下，p.24以下，p.102-106参照。

本質的な議論は以下のようなものである。即ち、判断の意味という、正しい、そして

誤った構造物は判断の決定からはまったく独立には与えられていない，ということであり（s. 16）それは判断の決定から分離し得るものであるか，或いは後の説明で，さらに貧しい意味で暫定的に公式化されるかも知れないように，始めて判断の決定に於いて，またそれと共に成立する形成物である。それを認識するためには，唯次のことが考察されるべきである。正しい，或いは誤った判断の意味は単なる価値性，或いは無価値性と結合したものであるとして，理解されてはならない。判断はやはり肯定か否定である。即ち何かを価値のあるもの，或いは価値のないものとして説明することである。即ち何かあるものについての価値，または無価値を決断することである。判断の意識は，それに応じて，肯定的或いは否定的な，また「然り」と「否」とが付着した意識である。即ちそれは，一つの組織構造が，そこで，価値或いは無価値を賦与されたものとして現象する形成物である。従って，その組織構造は，価値と無価値が何にふさわしいと考えられるか，という決定がなされるならば，より複雑な形成物からは区別するべきである。より複雑な形成物を構成しているのは，このような組織と，その組織から分離され，判断の決定の中で始めて明確にそれに課せられた価値の質と，なのである。要するに，以下のような様々な区別がなされねばならない。即ち，何について判断がなされたか，ということ，どんな判断がなされたか，ということ。また「思索されたもの」，或いは「考えられたもの」の全体の中で，基礎となっているものは何か，判断決定の全対象をなしているものは何かということについて区別がなされねばならない。ところが，価値または無価値が与えられたものと考えられ，次に「然り」と「否」とが付着した判断意識の構造があるのは，判断の決定作用の内以外のどこでもない。これに反して，その際価値と無価値が，それに対して与えられるところの構造は，明らかに判断的な態度決定からは独立的に，存在するのでなければならない。然り，それとは独立に価値と無価値を提示するのでなければならない。判断の決意に於いて思い浮べられる意味の構造の正しさと誤りは，それらの構造に従っている。

“Die Lehre vom Urteil” (“The theory of judgement”) of
Emil Lask and the Philosofof K. Nishida.

Haruo OHKUMA

College of the Arts

Kurashiki University of Science and the Arts,

2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan

(Received September 30, 1998)

Emil Lask is a philosopher who belongs to the tradition of new-Kant school. He was a disciple of Rickert, who is also a philosopher of New-Kant school. Lask's theme is, the same as new-Kantianer, about "Value". But his study went into the study of consciousness and judgement.

Nishida Kitaro, a japanese philosopher, established his philosophy on the hteory of "BASHO" = topos. On the prosess of establishing his theory, he has introduced the theories of many pholosophers. Lask's theory is among them.

Nishida quoted many sentences of Laske's theory. But the context of theory of Lask is not so clear in the text of Nishida. So we must translate Lask's book into Japanese and compare them, and then make clear the theory of Nishida. In the first place, we translated the introduction of his "Die Lehre vom Urteil" = The theory of Judgement.